

企画展・“びた 1 文” に秘められた歴史

海を越えた中世のお金

2009年10月10日(土)～2010年3月14日(日)

ごあいさつ

近年、発掘や古文書などの調査研究の飛躍的な進展により、中世(鎌倉・室町～戦国時代)における銭貨の使用実態が明らかとなってきました。

東アジア世界の中の中世日本では、中国から海を越えて大量の銭貨がもたらされました。そして、渡来した銭貨は人々に広く受け入れられ、それまで年貢として納められていた米や各地の特産物が市で取引される商品に生まれ変わり、貨幣経済が大きな発展を遂げました。

本企画展では、なぜ中国の銭貨が日本に大量に流入し浸透したのか、後に“びた銭”と呼ばれる粗悪な銭貨がどのような影響を及ぼしたのかといった命題に対し、最新の研究成果を踏まえて、読み解いていきます。さらに、石見銀山など戦国大名の鉱山開発によって登場した石州銀や甲州金を含め、中世の貨幣の全貌をご覧いただける展示になっております。

日本や中国など東アジアの貨幣をはじめ当館所蔵の多彩な資料を通し、貨幣が本格的に使われるようになった中世という時代を感じていただければ幸いです。

なお、展示室の奥では企画展の一環として、鉱山開発の様子が描かれた絵巻や16世紀につくられたさまざまな金銀貨をご紹介します。是非この機会に併せてご覧ください。

本企画展開催にあたり、ご協力を賜りました関係各位に心からお礼を申し上げます。

日本銀行金融研究所貨幣博物館

【主な展示資料】

資料名	年代
開元通宝	621(武徳4)年
皇宋通宝	1038～1039年(宝元年間)
元豊通宝	1078(元豊1)年
淳熙元宝	1174(淳熙1)年
慶元通宝	1195(慶元1)年
洪武通宝	1368(洪武1)年
永楽通宝	1411(永楽9)年
元豊通宝 折二銭	1078(元豊1)年
熙寧通宝 鉄大銭	1074(熙寧7)年
崇寧重宝 当十銭	1104(崇寧3)年
天贊通宝(遼)	922～925年(天贊年間)
乾祐元宝(西夏)	1171～1193年(乾祐年間)
正隆元宝(金)	1158(正隆3)年
銀錠(北宋～元)	10～14世紀
元紙幣原版(至元通行宝鈔)	1287(至元24)年
大明通行宝鈔	1375(洪武8)年
鑄写銭	12～17世紀
島銭	13～14世紀頃
琉球銭	15～16世紀
鳩目銭	16～17世紀
封印銭	16～17世紀
加治木銭	16～17世紀
ターレ銀貨	16世紀
銭壺	16世紀頃
寛永通宝100文緡	江戸時代
銭緡(一貫文)	江戸時代
国家金銀銭譜	江戸時代
錦絵「教導立志基 青砥藤綱」	明治初期
無文銭と鑄型(堺市出土)	複製品
永楽通宝枝銭(茨城県東海村出土)	複製品

○「金と銀の国 日本 一戦国大名と鉱山開発一」

資料名	年代
石州銀	16世紀
石州文祿御公用銀	1593(文祿2)年頃
石見国銀山旧記	江戸時代
銀山旧記	江戸時代
金銀図録	1823(文政6)年初版
三貨図彙	1815(文化12)年初版
甲州金(古金) 露一両金	16～17世紀
甲州金(新金) 甲重・甲安・甲定金	18世紀
甲州金(古金) 松木一分金	16～17世紀
甲州金(古金) 野中一分金	16～17世紀
甲州金(古金) 志村一分金	16～17世紀
甲州金(古金) 山下一分金	16～17世紀
蛭藻金	16世紀
譲葉金	16世紀
天正越座金	16世紀
円歩金	1596～1598(慶長1～3)年頃
天正長大判	1592(文祿1)年
永楽通宝(金銭、銀銭)	16～17世紀
天正通宝(金銭、銀銭)	1587(天正15)年頃
筑前博多御公用銀	1593(文祿2)年
山口天又銀	1593(文祿2)年
佐州金銀採製全図	江戸時代
佐渡鉱山関係用具	—

※展示期間中、一部の資料については展示替えを行います。

12世紀半ば～13世紀初頭

中国からきたお金 — 渡来銭のはじまり —

12世紀半ばから中国より銭貨が流入すると、再び銭貨が使用されるようになりましたが、朝廷や鎌倉幕府は銭貨の使用を認めていませんでした。

ただ、12世紀後半の史料のなかで“銭の病”という表現が使われており、銭貨の使用が人々の間で浸透していたことがうかがわれます。

北宋の銭貨
大量鑄造

北宋の滅亡

中国

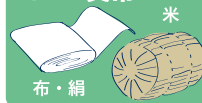
南宋から
銭貨が流出

銭貨の流入

民衆の間で
銭貨が浸透

『百鍊抄』1179(治承3)年
「天下上下病悩す。銭病と号す。」

当時の貨幣



朝廷・幕府は銭貨の
使用を認めず

絹や米の価格や物価が
不安定になることを
おそれ銭貨使用を禁止。

13世紀前半～14世紀初頭

人々につかわれる銭貨 — 市と流通 —

13世紀には、中国から大量の銭貨が流入し、人々の間で銭貨の使用が一層浸透すると鎌倉幕府や朝廷もその使用を認めました。また、それまで各地の生産物で納められていた年貢は、銭貨で納められるようになりました(代銭納)。そして、生産物は商品として市で取引されるようになり、商品経済が発達しました。

金・南宋の滅亡

元で
銀・紙幣が流通

銭貨使用禁止

中国

銭貨の大量流入

民衆の間で年貢を
銭貨で納める動き
(代銭納)

鎌倉幕府は、年貢を
布から銭貨で納めるよう
命じる(1226年)。
朝廷も銭貨の
使用を認める。

13世紀前半以降
貨幣としての役割が銭貨に集約



14世紀前半～15世紀後半

人々に求められた銭貨 — 銭貨需要の増大 —

14世紀になると室町幕府は、中国(明)との交易を通じて銭貨を輸入しました。一方、畿内や諸国をつなぐ都市では、地域の名産品などが盛んに取引されるようになり、「有徳人」と呼ばれる裕福な商工業者も出現しました。このような流通や商業の発展とともに、国内での銭貨の需要が増大しました。

元の滅亡

明では
銭貨・紙幣が流通

海禁政策

中国

銭貨の流入は減少

銭貨需要の増大

- 銭貨を大量備蓄
- 手工業の発展
- 有徳人(富裕層)の出現
- 都市間での商業の発展

14世紀前半
後醍醐天皇、銭貨「乾坤
通宝」・紙幣の発行を計画

↓
建武の新政の失敗で
計画も頓挫

日本国内でも渡来銭を
真似た銭がつくられる
(模鑄銭)

なぜ日本で貨幣を発行しなかったのかな？

中世の日本では、国家が貨幣を発行することはありませんでした。その要因として、国内での銅の産出量の不足や、自国で鑄造するよりも中国から輸入したほうがコスト面で勝っていたことなどが考えられています。

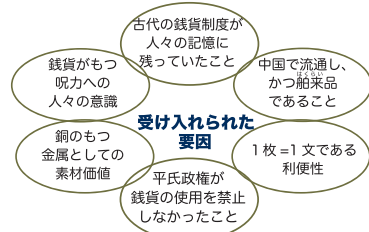
銭貨が受け入れられた理由

銭貨は、誰にとっても1枚=1文の価値でわかりやすく、絹や米等の貨幣のように重さや量を計る必要がありません。また銭貨1枚(小額取引)や銭縷(高額取引)としても使用でき、たいへん便利でした。



銭縷

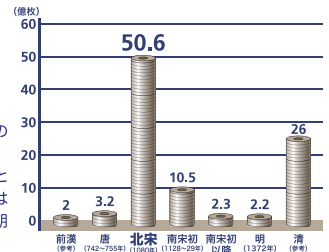
銭貨を薬や麻で作った紐でまとめ、中世では一般的に96～97枚で100文とみなしました。



こんなにたくさん？！

中国史上空前！ 北宋時代の銭貨鑄造量！

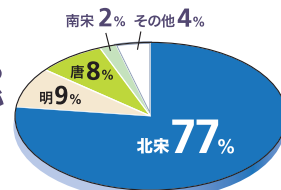
北宋は、中国歴代王朝の中で、最も多くの銭貨を鑄造しました。銭貨を最も鑄造した年の数量を、王朝ごとに比較すると、年間10億枚を超えたのは北宋・南宋初・清のみで、その他の王朝では2～3億枚となっています。



中国各王朝の年間鑄造額(ピーク時)の比較

こんなにたくさん？！

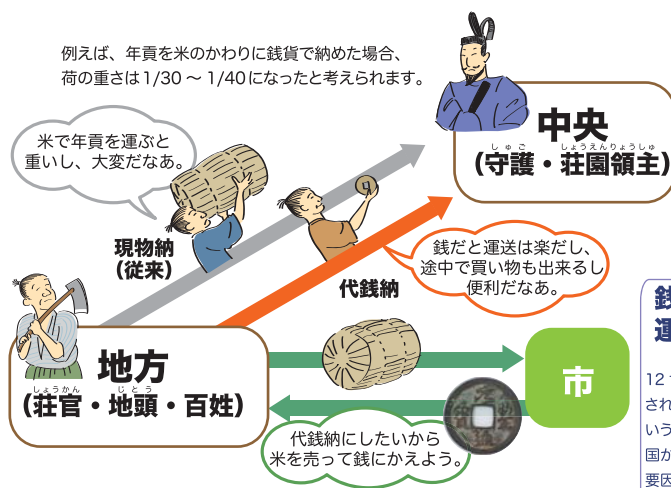
日本で出土する 銭貨も北宋銭が 圧倒！



日本の大量出土銭における中国各王朝銭の割合
財団法人「出土銭貨の研究」(東京大学出版会、1999)より作成

なぜ年貢を銭貨で納めたのかな？

人々が年貢を銭貨で納めたのは、生産物で納めるより輸送コストの面ではるかに安かったことが理由の1つと考えられます。



市の風景

- 商品経済の発達 -

代銭納の普及により、各地の市では生産物が商品として売買されるようになり、のちに全国規模での商品の流れを生み出しました。

備前国福岡の市の様子

『一遍上人絵伝』(清浄光寺蔵)
銭縷を数える女性



市では、商人や荘官などとの間で銭貨と物資の交換比率(和市)が定められました。和市は需給のバランスや季節や地域によっても変動しました。

商人の中には、権力者や寺社に奉仕し、関銭免除などの特権を得て諸国を移動するものや、営業特権を守るために「座」という同業者集団を結成するものもありました。

銭貨はなぜ日本に 運ばれてきたのかな？

12世紀以降、中国では主に紙幣が使用されます。銭貨は紙幣の流通を妨げるという理由でたびたび使用が禁止され、中国から東アジアの国々へ銭貨が流出する要因となりました。



13、14世紀中国(元)の紙幣
(原稿から作成したイメージ)

どのように運ばれてきた？

銭貨は、陶磁器・金属器・香木などと共に、貿易船で運ばれてきました。



博多出土の舶来品(福岡市埋蔵文化財センター蔵)

商業の発展と大金持ちの登場

14世紀(鎌倉末～南北朝期)になると、畿内と諸国をつなぐ中継都市では年貢・商品の輸送や卸売・為替業などを営む「問丸」とよばれる運送業者が現れました。彼らは各都市に集められた商品の中継や売買に従事しました。

中世の流通を担った人々

中世の人々の生活を記した史料(『庭訓往来』14世紀)には、

室兵庫の船頭、淀河尻の刀禰、大津坂本の馬借、鳥羽白河の車借、泊々の借上、湊々の替銭、浦々の問丸、割符を以て、之を進上し、倣載に任せて之を運送す

とあり、泊や湊や浦といわれる流通の拠点で従事していた運送業者や金融業者の様子がわかります。

刀禰：船頭などの交通業務を担う者

馬借：馬に荷を積んで運ぶ運送業者

車借：牛に車を引かせて荷を運ぶ運送業者

替銭：遠隔地に送金する代わりに出された手形、為替

問丸：渡船、船宿や荘園年貢・商品の運送・保管・販売等に従事した業者



『絵本庭訓往来』

(東京大学文学部附属図書館蔵)

『徒然草』にみる大金持ちの心得

『徒然草』(14世紀)第217段には ①人間世界は永久不変であることをモットーに無常を悟らない 大福長者の処世術が書かれてい ②自分の欲求に用心し、かなえようとしてはいけない ます。この頃、富は徳を積むこ ③銭を主君や神のごとく尊びながら使用せよ と考えられており、お金持ちに ④恥ずかしい目にあっても恨まない なるために五つの心得が挙げら ⑤正直を心がけ、約束を守れ れています。 倣約に励み、銭を尊びながら生きる商人像がうかがわれます。

日明貿易での銭貨のやりとり

—銭貨を中国に催促する幕府—

室町時代の外交について詳しく書かれた史料(『普賢国宝記』15世紀)には、室町幕府3代将軍足利義満や6代将軍足利義教が、明に度々銭貨を求めていたことが記されています。

『国家金銀銭譜』には、1403(応永10)年、銭を積んだ中国船が相模三浦に漂着し、鎌倉公方足利満兼が対応したことが記されています。日本と中国との間で頻繁に銭貨のやりとりが行われていたことがうかがわれます。

なぜ日本への銭貨の流入は減ったのかな？

中国での銭貨使用の再開

中国では、14世紀半ばから国内での銭貨の流通が再開され、日本への銭貨流入の減少に繋がったといわれています。

明の海禁政策

明は、宋・元の時代に活発であった海外貿易を禁止します。海外貿易は朝貢貿易に限定され、私貿易は厳しく取り締まられました。